



第四中学校区



黒滝の名の起り

黒滝の縁切り坂

黒滝は八幡（やはた）、梨平、音ヶ瀬等の部落からなっているが、その八幡に大滝神社正八幡宮が鎮座（ちんざ）ましましている。この八幡宮の後の山中に滝があり、この滝は北面しているので黒く見えることから黒滝という村名が起ったといわれている。

黒滝の八幡（やはた）の八幡宮

曲亭馬琴の著作 椿説 弓張月の増補 越後名寄 巻の三に「刈羽郡八幡村八幡社あり 文治の始め源義経朝臣がかくれながら奥州へ、みやこおちした時、しばらくここへとどまって、義経は為朝の霊をおむかえして、鎧（よろい）、刀等を寄付した。賞罰はつきりとし、近年神木をきった者が罰を受けたことがあるという。あるいは、義経、その身のはかなさをなげいて、叔父為朝のことを思合せてその神霊を八幡宮に合し祭り、お祈りしたのである」と

（注）甲子楼主人がこの後に（義経のこの地通過説は非なり）と記してある。

真偽は別として、このようなことが記してあることを述べる次第である。

黒滝の竜雲寺の裏山、火葬場の西の山上に登る坂の名を「縁切り坂」といい、急な坂である。ある村からここに縁づいてきた女がある。ある日、山上にある薪（たきぎ）を家まで運ぼうと夫といっしょにこの坂にかかったが大変急なので、ひとり登ることが出来ないうで夫の手をかりてやっと山上にたどりついたが、薪を背負ってこなどは降ることができず、廻り道をしてようやく家へ帰ることができた。

このことを生れた家へ帰って両親に告げたところ、両親はかわいそうに思っただけ縁を申し込んだという。

この土地に縁づいたもので一度この坂を通り、縁切りを願わないものはなかったというので「縁切り坂」と名づけたという。

この坂を越えたところに田、畑もあるのでこの土地の人々はこの坂の上り下りはやむを得ないことであつたという。

黒滝のつかのきの泉

黒滝と新道の間、旧県道のわきに「つかのきの泉」というのがあつた。この泉は昔、法力のある僧（弘法大師か）が掘ったとかあまりはつきりした言い伝えでないが、因縁ばなしがあり、おでき、くさ等の皮膚病にききめがあるとされ、近くの人々がくんで行っては治

療に使ったという。

今は県道が別のところを通り、しかも土地改良などでその泉の位置もはっきりしない。

馬肝石 (ばかんせき)

古跡考に黒滝村竜雲寺の隠居の話に 天明のころ、当地のある人がながく一頭の馬を飼っていたが死んでしまったので、穴を掘ってその中に埋め土をかけておいた。ところが野犬がかぎつけて掘りかえたものか、馬の腹が破れ出てしまった。そこへ子どもたちが集って 竹で馬の腹の中から臍物(ぞうもつ)をとり出したところ、爪のような堅いものが出てきた。長さ三十センチばかりであった。それを石でくぐらしてみたと、中はからっぽで水晶のような石でした。

その後京都へ持って行き、玉みがきに見せたところ「これは馬肝石というものである」といって高い値段で買いたったという。

(注)この馬肝石の話を竜雲寺でたしかめたが話ばもとより、その馬肝石も全く聞いていないとのことである。

新道の名の起り

新道は昔、「神道」または「新堂」と言ったといわれる。

「神堂」というのは文治五年源頼朝奥州征討(せいとう)の時、

宇佐美平治実政が当地を通るときに大風雨があったので、当地の鶴川神社に祈願したところ、よい日和になったので喜びの余り、この里を「神道」と名づけた。ということからである。

「新堂」というのは当地の三諦寺(さんだいじ)の裏山から出て来た古瓶の中の写経の奥書の中に宇川庄新堂村…建仁三年とあるところから、かつては「新堂」といったように思われる。

これら「神道」「新堂」がいつのころから「新道」となったかははっきりしない。

なお「新堂」とは、以前あった地福院、正法寺、安楽寺の三か寺を応永年中に合併し、後、中興して今の三諦寺という名にしたので、新しい堂のある地という意味か、その後三諦寺が焼けて新しい堂宇が出来たので、そのことを言ったのかははっきりしない。

新道の石胡桃 (いしぐるみ)

昔、弘法大師が北陸おまわりの時、新道をお通りになったが、ちょうど鶴川の折り橋のかけかえ工事をしていたので、大師はそこに働いていた若者たちに、通してくれるよう頼んだ。ところが大師の姿が余りにみすばらしかったためか、若者たちのいたずら気からか、「お前のような乞食坊主(こじきぼうず)は通すことはならぬ」と断った。大師はすぐごと引き返していった。その橋のたもとにあった胡桃がその年の秋から石のように固くなって口を開かなくなった。村人たちはさきの乞食坊主と思っただのは弘法大師であったことを知って法力(ほうりき)におそれ驚いたという。

(注) 別に

a 大師が橋のたもとの胡桃をくれと言ったのにくれなかったとの話もある。(伝承)

b 大師が一老婆の家で

いもを恵まれよといったのに老

婆が惜しがって「これは石だ」といった。それから、その

いもは 石のようになったとの話もある。(地方伝説集)

新道の折橋

この橋の名前について二つの話がある。

一つは石胡桃(いしぐるみ)にちなんだもの。弘法大師が諸国をお廻りの時、石胡桃の話にもあったようにこの橋のかけかえ工事していた。そして弘法大師が渡らせてくれと願ったのに、村人がすげなくことわった。しかも当時のおもだちをしていた阿部さんが先頭になって乞食坊主のような姿をした大師に悪たいを言い「お前が渡るとこの橋は折れるぞ」と言った。大師は黙って人々のののしりを背にこの橋を渡った。渡り終えたとき、橋は大きな音を立てて真中から折れてしまった。それでこの橋を折橋というようになった。そのせいか阿部さんの家ではそれ以来運の悪いことが続いたとも言われている。

もう一つの話は昔は「おり橋」といったというのである。それは鷲尾の観音さまが尊い仏様なので、お参りする人はこのおり橋で馬やかごをおり、徒歩でお参りした。それで「おり橋」といったというので、野田に乗り橋があるとのことである。

(注) 旧道が折れ曲っているところにかかっている橋なので「折橋」という名が生れたのでなからうかとも思われるが、一考を試みたい。

新道の六地藏尊

新道の小字田尻と夏井の境に六体の地藏さんを安置した小さな堂がある。以前はお参りが多く、「大願成就(たいがんじょうじゆ)」とか「南無地藏尊」とか書いた赤や黄や白の小さなのぼりがたくさん上げられ、お祭の日など子どもたちも集り、ちょっとしたにぎわいをしたものである。

この地藏さんは新道の漁の好きな某が鶴川で投網した際に引き上げたもので、某は家に帰って安置し、燈明を捧げた。その夜、夢に地藏さんが立たれ「われは幸運にもお前に救い上げられたが衆生済度(しゅじょうさいど)―世の人々を助ける―したいので人通りの多い所に移してもらいたい」とお告げがあった。

そこで某はそのお告げに従って翌日道路ばたに安置した。ここは、上条殿が春日山登城の際、お通りになるところで人々の行き来のはげしいところで、この村人はもとより通行する人々も崇拜するものが多く、願をかけると成就しないことはないということで信心する者が多かった。



新道の笠かぶり地蔵尊

六地藏さんの近くに十王堂とよぶ、だれも住んでいない庵寺（あんでら）がある。その堂の前に、いつも笠をかぶられた地藏さんがおかれている。この地藏には次のような話が伝わっている。

昔、新道の嘉一郎さんという人が荷馬車を引いて荷物を運んでいた。この人がたまたま通りかかったところ、どうしたことかこの地藏さんがころがっていられた。そこで嘉一郎さんは重い石の地藏さんを起して、元のところに立てなおし、お参りして家へ帰った。

その夜、庵寺の庵主（あんじゅ）さまの夢枕にこの地藏さんが立たれ、「だれかは知らんが、わしを起してくれた馬車引きがある。さがして礼を言ってくれよ」と告げられた。

庵主さまは翌日から、さっそくその親切な馬車引きを探したところ、嘉一郎さんとわかり、あつく地藏さんからの礼を述べられたところとである。

（注）嘉一郎さんは現存し、この話を肯定している。

新道の庄蔵（庄大）

新道の庄蔵と言えば上条郷で腕力家で鳴らしていた。刈羽郡内では鯖石郷の半兵衛とならんで有名であった。

この庄蔵は相撲が大層好きであった。

ある年、上州方面へ米つきの出稼ぎに出かけた。彼は菅笠（すがさ）をかぶり鉢崎の関所にかかり、役人にどこへ行くかとたずねられると上州へ行くと言い、どこの庄へ行くかとたずねると新道の庄だと言う。何を聞いても奇抜（きばつ）な答ばかりして関所を通ったという。

上州で米つきをしたが力があるので二人前の仕事をした。雇主はよい雇人が来てくれたと喜んでいたが勘定する時には二人前の賃金を渡せと言ったので雇主もいろいろ言い争いをしたが庄蔵の勢いに怖れ（おそれ）をなして、とうとう二人前の賃金を払ったということである。

この庄蔵は新道の上村（かむら）の人で新道の人は庄大といい、産土神の諏訪社に力を与えたままと祈願し、満願の日力だめしに鉄棒を曲げてみたら、あめのようにになり、歩いてみたら足がずぶりと雪道を歩くように土にめりこみ、青竹を握ったら節がずぶれそれを体に帯のように巻きつけることが出来た。これでは力があり過ぎるので願もどしをした。それでも人の何人力もあったと、話も残っている。

新道の溜清水（疣清水）

鶴川神社の境内の東北のすみ（今は河川改修で境内の外となり鶴川の流れの中へ入ってしまった）に湧き出る水がきれい、昔から瘤（こぶ）、疣（いぼ）などを治すききめがあると伝えられていた。

飯塚さんの先祖

飯塚さんの先祖は六部であったとの世伝がある。

この六部、諸国修行の途中、当地のハリの木（はんの木）の下で休み、昼寝をした。その夢に、ハリの木の下に黄金の入った瓶（かめ）があることを告げられた。目ざめて、その瓶を掘り出したところ果して黄金がたくさん入っていた。その黄金で六部は大金持となり、ここに永住したとのことである。近年までこの木を「金の木」と称して大切にしていた。

なお、近年まで飯塚さんの近くの某家に、この六部（先祖）が足をとどめたとのことで、暮になると某家より飯塚さんへ「みそ」一重が届けられるしきたりがあり、その返礼として飯塚さんより、塩鮭（しおざけ）一尾（び）が届けられたが最近はこのことはやめられたとのことである。

新道の十二塚

新道の風牧山（かざまきやま）は今は大部分、柿団地となり柿と野菜がつくられているが、この丘状の風牧山のでっぺんに十二塚と（ほうむ）ったものと言われている。名ある人々は勝願寺などに葬られ、墓などもあるが、この十二塚は下級の人々の、それこそ名も

なき人々を埋葬（まいそう）したのでないかと思われる。どのような事情で新道の風牧山に埋められたのか判明しない。

塚の位置はあまりはっきりしなくなってきたが、時に小砂利がうず高くなっていたり、畑に開墾した際、人骨が出てきたりしたことでそれと知られる程度である。

上村（かむら）橋

新道の上村（かむら）にかむら橋という橋があった。水ばしともいったが、今は諏訪橋といっている。はじめは用水のみの橋であったので水ばしといった。かつて新しくかけかえる時、上村の小池という人が渡り初めをすることになっていた。まだ渡り初めをしないうちに旅の山伏が新しいかむら橋を渡ってしまった。小池某はカンカンに怒って、山伏を打ったところ、うち所が悪く、山伏は死んでしまった。小池某は死んだ山伏を橋のもとに埋めた。数年たってから小池某の家には不幸があいついで起ったので村の坊さんにみてもらったら、

「それは殺した山伏のたたりだ」と言われたので山伏の死体を掘り出して、ていねいに改葬し石塔もたてた。最近まで、その塚は残っていたが道路工事や橋のかけかえ工事では塚はなくなり、石塔の位置はかわっている。



大河内の名の起り

大河内新田は行政上は旧高田村であるが、地勢的には水源池の川内の奥になっている。新道へ出るには現在も山道を通って来なければならぬが、以前はもっと急な峠道をかけて来なければならなかった。

応仁年中に河内（かわち）の国から落人がこの奥地に来て、鋳物（いもの）を業としておったとのことである。このことから河内という名がついたのではないか。また大河内というのは奥河内の意で、それが転かしたのではないかと思われる。奥が大と転かした例は各地に見られる（例、大白川、大蒲原等）

なお、この鋳物を業とした人は後に大窪村（現在の大久保）に移ったとのことである。

更に大河内新田に居住していた 関矢修一氏の言によれば、自分の畑のなかに金くそが出て鋳をいためたことがあるとのことである。

（注）大河内で鋳物場のあったところは、泉山という地所で、大河内の部落でも、やや西北より一鯨波に近い方である。

大河内泉山の酒井戸

昔、大河内に老夫婦がいた。おじいさんは山仕事に出かけると、

いつも酒によった様子で気分よく帰ってくるので、おばあさんは不思議に思っていた。大河内は山深いところで酒屋もなし、家から出かける時も別に酒を持って行く様子もなし、おばあさんには何ともわからないことであった。おじいさんにただしてみたがさっぱり要領を得ない。

そこで、ある日おばあさんはおじいさんにわからないように見えがくれに後からそっとついて行った。おじいさんは山へつくとせつせと働いている。おばあさんがびっくりするほどかせぐ。そのうちに家へ帰る時刻ともなると、おじいさんは仕事道具を片づけて、やおら近くの泉の出ているところへ行き、水をうまそうに手ですくって飲んでいく。ちょうど酒を飲んでいくようである。そのうちにだんだん酔いがまわってきたように、いい気分になり、鼻唄（はなうた）など歌って家の方へ帰って行く。

おばあさんは早速泉のところへ行って水を飲んでみたが、酒どころか、ただの水であった。おばあさんはしゃくにさわったのか、りんき性であったか、その泉に小便をした。

その後、その泉はおじいさんが飲んでも酒にならなかったとサ。

大河内湯の谷の湯

大河内新田の湯の谷というところに昔から鉱泉がわき出ている。この鉱泉が何時のころ発見されたかは、はっきりしないが、おできくさなどの皮膚病にききめがあるというので、一時五軒ほどでお湯屋を経営し、茶屋も一軒、店を出した程である。感謝の意味で村で

観音像をまつた程であったが、何しろ交通不便であり、山の中でだんだん人もこなくなってしまう。最近開発の計画もされたようであるがものにならないで終わっている。

この湯の中からブクブクとガスも出ているので（メタンガスらしい）このガスを使って湯をわかしたならば発展するのではないかと言っている人もある。

（注）この鉱泉、大河内部落の奥約五百メートルにある。昭和四十五―十六年にかけて、新しく林道開きくのため、ほとんど埋められ、土地の人は、跡が残っているというが、ほとんどわからない状態になってしまった。昭和四十六年十月 三宮 勉氏実地踏査

約五百メートル下手の高橋某家で昔から、この水（湯）をくんで、湯屋を営業していたと伝えられ、屋号を「茶屋」という。

昭和四十五―十六年にかけて過疎化が急ピッチで進行し、この部落はかって十一、二軒あったものが、ほとんど一―二軒になってしまい、やがて近いうちに完全難村の運命をたどることであろう。

上方の名の起り

三説がある。

一説は昔、上方は上条氏の領地で、下方は宇佐美氏の領地であった。その領界の関係で上方といったのである。

二説に水上、水下の関係で上方、下方といったとの説である。三説は上瀉、下瀉からきたという説である。

（注）何れも鶴川の流れを中心としての説であるように思われる。

上方の新田場

上方の新道に近い、鶴川にそったやや低い田地を「新田場（しんでんば）」という。ここは鶴川が曲りくねっていたのを新道側に堤防を築き、鶴川をまっすぐにし新しい田地を造成したもので、明治元年ころ上方の中村氏等が中心となり、たくさんのお金を出し合っ
て出来たものだという。

上方の榎田（えのきだ）

上方の小字名であったとのことであるが、土地改良の結果この地名はなくなった。ここは鶴川の川岸で大変大きな榎があったところを田地としたという言い伝えがあったが後に田を整備する時になるほど大きな根株が田の中にあられ、これを取除くために爆破しなければならなかったとのことである。

下方の名の起り

上方同様三説がある。

第一説は下方は宇佐美領、上方は上条領との説

第二説は水上、水下より起るとの説

第三説は下瀉、上瀉より起るとの説

なお、元禄中、柏崎明蔵寺の僧、隆光が下方村、上方村の田地を起こしたとの書がある。

下方の大悲閣（泉どの観音仏）

大河内と下方の境の山林に「泉ど」という用水池がある。

昔、京方面から盗まれてきたとかいう観音仏が、この池の中に捨てられた。そののち、朝夕の太陽の光に池の中でキラキラするものがあるのて村人が池ざらいをしたところ、この観音さんが現われた。村人たちはこの仏さまを極楽寺の末寺である下方の大悲閣（だいひかく）におまつりしたと言ひ伝えられている。

（注）現在は極楽寺に移されているとのことである。

横山の巡礼塔（観音塔）

横山の入口、大榎（えのき）の下に観音像を刻んだ塔が妙高山塔と並んで安置（あんち）され、夏の暑いときには農民や行人の休み場になったもので、どんな無礼なことをしてもばちが当たらないといふ有難さであった。

ある年、女巡礼が一日中歩き回ってつかれたので、民家に一夜の

宿を願ったが、だれ一人同情するものがなく、困ってこの塔にたどりつき、「今夜は野宿（のじゅく）か」とためいきをついた。その中にトロトロと眠ってしまった。夢に南西方に行けば必ず宿があるとお告げがあると同時に目がさめた。これは観音様のお導きと喜び勇んで下方村へ行き、二・三農家をたずねたところ、お告げのようこころよく一夜の宿をかしてくれるものがあつた。

女巡礼は観音様のお告げの話をしたところ、主人も不思議に思い、「自分も前から観音塔をうやまつており、もし悪夢を見るようなことがあれば災難のないようお願いするようにしている。」と話し、お互いにいろいろな物語をしてねむりについたらという。

巡礼で一夜の宿のない時は、この巡礼塔を拜んでお願いすれば宿があつたという話である。

藤橋の観音堂

この観音堂は春日某の裏にあつて、昔は寺であつたところである。いつのころか、火事が出て焼けてしまった。村民が集つて灰を片つけて土台をはねると土中から仏像が一体あらわれた。これはもつたないといふ、清水で土を洗い落し、これを本尊としてお堂を建てた。そして、この像が観世音の尊像（そんぞう）なので観音堂と呼んだ。土中からあらわれた尊像であるといふので遠近から参拝するものがたえないで、さいせんが山のようにあがつたので、それで今の堂を再建したといふ話である。

当国三十三番の観音第七番

紫の雲へ棚引く藤橋に

かけてぞたのむ二世の願いを

という歌が伝えられている。よみ人知らず。

藤橋の阿弥陀瀬の名の起り

藤橋に阿弥陀瀬（あみだせ）という字名がある。これは昔この地から阿弥陀如来（あみだによらい）の尊像が土中から掘り出されたことからであると言われている。

（注）今は「網田瀬」と書く

藤橋の燃土（ねんど）

小字谷内より薪土出ず

白川風土記に

薪土 田所の中土を掘り取って、積みかわかし 之をかまどにたくとポウポウと燃えて、たき木を燃やすと同じようによく燃える。日本紀 天智天皇七年に越後燃土 燃水とあるは、この土と蒲原の草生水（くそうず）の油であるう。

刈羽郡で燃土が出たのは鯨波、土合、藤橋

たる足の女

藤橋に六という乞食がいた。六の妻君は声がかかったので、唄を歌いながら、六と共に乞食をして暮らしていた。六の妻君は太っちょで六のかかあはたる足だ

たるよりでっかえ

と童べ歌に、歌われるほどであった。

某日、柏崎納屋（なや）町で物乞いしていた時、瓦を満載した大八車をひいて働いている女衆に行き会った。夏の日盛りだったので、浜の女衆は汗をたらたら流していた。それを見て、六の妻君は

「あんがに汗水たらして大八車をひかねばならぬ程、落ちぶれたくないもんだね」

と六にささやいたと言う。

堀の弁天ケ池

弁天ケ池は堀と南下（のうげ）の境にある。あたりは木がたくさん生い茂り、昼も暗く大変さびしげなところである。池水は用水と成って堀の人々はこの池のおかけを受けている。

昔、一匹の大蛇がこの池にすみついた。時々出て来ては村の女にとびかかるので、村民は困っていたがどうすることもできなかった。そこで村民が集り相談して、近江の琵琶湖の竹生島の弁天神にお願いに行った。その夜夢知らせがあって「願いは聞きとどけてやる。

もう十日たてば雷雨（らいう）がある。何も驚くな。その雷雨に乗せて大蛇をこの湖の中に引き取るのだ」と、夢がさめて急いで郷里に帰り、このことを告げると村民は大いに喜び、その日を待った。

案に違（たが）わず、十日目に大雷雨があり、通行が止るくらいであった。何物か黒雲に乗って西方へ行行ったかと思うと、雷雨もやみ晴天となった。

村民は相談して、竹生島へお礼参りをし、幣帛（ぬさ）を分けていただいて帰り、池中に島を築き、石の祠（ほこら）を建てて安置した。それで弁天池と名づけたという。

堀の八幡清水

原の谷に馬蹄形一馬のひづめの形一の三・三平方メートル位の清水が湧き出ている。どんな日照りでも水のかれるということがない。昔から八幡さまの水が頼みだという。病人は大てい末期（まつご）の水として、この水を使った。今でもそのようである。

ある日心もとない部落民がこやし桶を洗ったので、八幡宮の神様が北条村へ逃げて行かれたとのことである。明治初期のころまで北条に堀八幡という神社があったというが、今はわからない。

（注）この清水は今、金子惣一氏の地所になっているとのことである。

堀と藤橋の屋号

堀と藤橋に非常に変わった屋号がある。これは昔の人たちが互いに屋号をつけ合った結果であると言われている。自分の家に変な屋号をつけられると、そのお返しに人の家にはやな屋号をつけるというようなことから変った屋号が多くなったということである。

海岸地方でもそうした傾向があるように思われる。柏崎では中浜あたりに多いという。

また出雲崎でも随分変わった屋号がある。

堀と藤橋では、例えば「へつり」「たんから」「じょうべし」「かま」「はずれ」「いど」「そば」「きちん」「しちれん」等。

南下の弥鬼が沢

南下の東北方にある沢を弥鬼が沢という。随分さびしい沢である。その沢の由来は、昔、この南下に弥吉という、ならずものがいた。村民はだれもかれも恐れきらい、親類までも、まむしとあだなして、つき合いをしない。それでだれ言うもなく「弥鬼（やき）、弥鬼」と呼んだ。

ある年、村民一同が庄屋宅に集った時、一人の老人がこの村に弥鬼がいるために、みんなが大変迷惑をしているが、一層のこと殺してしまったらどうかと相談した。前々から憎まれ者の弥鬼を追払う

ことなので、だれ一人不賛成を言うものもなく、親類どもも双手を挙げて賛成した。しかし役所に知られたらどうするかと言うと、その時は自分達が負うという者もあって、このことは直ちに決まった。そんなこととは知らず、弥鬼が威勢よく入って来た。村民はいろいろもてなし酒をすすめた。弥鬼は殺されるとも知らずに、たらふく飲んだり、食べたりし、よっぱらって帰って行った。門に張ってあった縄で弥鬼が倒れると待っていた某が割木を振り上げ、たたき殺した。

そこで人里離れた山中へ埋めて、世間へはどこへ行ったか知らないが、そのうちに帰るでしょうと言いふらした。もとよりひとり者であったから探す者もなく、そのままになってしまった。弥鬼を埋めた沢なので弥鬼が沢というようになった。

南下の延命地藏（子守地藏）

南下の延命地藏は近所の留守宅をお守りしたり、子どもの守りをする石仏であると言われた。近所の留守宅にたくはつ僧が来るときは地藏尊が子どもになって先に行き、白米一わんづつ出して下さるという誠にもつたいない石仏であると、ある老人が語ったという。

るが、信心者があるとみえて、「大願成就」（たいがんじょうじゆ）の奉納旗がかかげられている。この観世音は雨乞の神様であると村の人は言っている。

昔、大日照りで、この辺一帯の田はひびわれができ、稲はまさに枯れようとした。村の人たちはひたいを集めて雨乞（あまごい）の相談をした。その時、村でも知者と呼ばれた老人が、何とぞこのことは私にまかせて下さいと言った。そこで村の人はこの老人におまかせした。

老人は白い着物を着て五日間通夜して、この観世音に雨を降らし給えとお祈りした。満願（まんがん）の夜、老人の夢枕に観世音が立たれ、雨乞のことは私に願ってもききめがないから、隣の妙高山塔にお願ひするがよい。私も隣のことだから頼んでやる。村のものも心をこめて頼むがよい。そうすれば必ず雨が降る。私の言葉を決して疑ってはならぬ。と告げられると夢からさめた。不思議な夢だが観世音のお告げであろうと村人に知らせた。それから村中一同が妙高山塔にお祈りしたところ、五日もたつと妙高山の方から雷が鳴ってき、風がさつと吹き、黒雲が西から東に走り、やがてしのつくような大雨が降ってきた。半日程降ると雨は止んだ。この雨で稲は生きかえり、ぐんと伸び、畑の作物も実がはいった。これから日照りの時は村民はこの妙高山塔にお祈りしたという。

他耕地の妙高山塔（雨乞観音）

他耕地の佐水へ行く道のそばに観世音像や妙高山塔を安置してあ

上条城をめぐる地名(六)

○中曲輪(なかぐるわ)

城の東側に中曲輪という地名が残っている。この部分は低く、今は深い田となっていることから曲輪が堀としての役割を果たしていたのであろう。この中曲輪の東に外堀としての鶴川が流れている。

○館(たて)

黒滝部落に「たて」という部落があり、その上の山が黒滝城である。室町時代から戦国時代にかけての上条氏はむしろ黒滝の館を居館として黒滝城を使用したのであろう。

○御殿橋

本丸前面より小坂を下るところに溝があって橋がかかっている。御殿橋という。また流れている川を御殿川という。

○花水沢の乱穴

上杉御家騒動の折、乱があり、破れた武士がこのほら穴の中にかくれたといわれている。

○城山(ぞう山)

村人はぞう山と呼んでいるが、古町にあり、白川風土記に

「古町に古城趾あり、上条の遠見番城と申伝、今頂上に礎井戸有之候」とある。

○見返り松と八幡原の首切場

八幡原という丘に処刑場があったということです。なお検視役

の役人のいた場所の跡というのが今もあり、塚のように土を高く盛った上に小石がしいてあったという。

見返りの松―今はない―というのがあり、罪人が処刑場に連行される時はこの松のそばの橋までくると、もう一度来た道をふりかえって見ることから名づけられたものであり、ここまでくると、もう歩く力がなかったという。

城が原の夫婦石

上条神社の境内に、夫婦石という二個の石がある。この石は高河内山道路修繕の際、掘り出されたもので、二個の石はだきあうような格好であった。

そこへ村の老人某がやって来て

「三晩も夢に、この夫婦石があらわれ、今まで土中にかくれていたが、世に出るようになったからよろしくたのむ」

と、頼まれたと言いのを聞いて、村人が相談の上、この社地に安置したという。

赤淵の由来

上杉謙信の家臣に名将のはまれ高い、上条弥五郎という人あり、上条城に居をかまえ、一万石位の殿様であった。

弥五郎はある日、ともを連れないで領内を流れる鶴川に釣りに出

かけた。

ところが朝早くから来ているのに雑魚（ぎこ）一匹もつれない。日も西に傾いたころ、雲のかげが水にうつってすばらしくいい景色であった。

ふと水面を見ると、波を立てて泳いでくるものがある。

よくよく見ると蛇である。足もとにきて少し見つめた蛇はいきなり足にくいつき、足指を四本ものんだ。さすがの猛将も「うむ」とばかり、小刀を抜いて切り捨てた。すると蛇の体内から血が流れて鶴川の流れも真赤になった。

こんなことがあったので、血が流れたところが淵になって「赤淵」の名がついたという。

鷲尾山不動院観音像由来

「夫れ当山の御本尊千手観世音菩薩は人皇五十一代平城天皇の御代、今を去る一五〇〇年大同二年（八〇七年）空罽上人の開基なり。」

そのころ、ここは大木が生茂って、屋でも暗く人の通りもなく、ただ鷲ばかりが多く、すんでいました。近くのひやくしよが牛を引いて、ふもとを通ったところ、黒鷲が一羽飛んできて、その牛の子をつかみあげ、この山めざして飛んできた。百しよは村の人を頼んで探してみたところ、この山の岩穴に、鷲の羽をしとねとして白髪の老人が坐禅（ざぜん）をしていた。村人は大変驚いて、老人に牛の子の行くえをたずねたところ、老人が言うには、「お前たち、よくもここへ来たなあ、その牛の子は、わしが助けてある」といっ

て、やぶの中から引出したので、村人は大変喜んで老人を拜み、あなたのお名前は何と申されますかと聞くと、われは不動というもので、この山にかくれ住んで、凡そ二〇年余りになるといふ。村人は不思議に思い、それから毎日、うやまってお参りしたので老人が言うには、「わしが長命であるのは、一心に千手大悲のお経を読んでいるからである。わしは、この山を立ち去るから、お前たち、わしのことを思うなら、このしとねの鷲の羽を京都へ持って行き、商え、その商った金で千手観音の尊像をもとめて、この山に安置し、おのおの信心すれば、われをうやまうより百倍もおかげがあるであらう」と言われたので、村人は急いで京都へ上り——中略——稽主勲稽文会作、観音の尊像をおつれして越後へ帰った。

庄七淵

黒滝に長泉寺不山寺という寺があり、それから約二百メートル程下の鶴川に「庄七淵」という淵（ふち）があった。このあたり一の大淵で湖水のようであった。そしてここには主がいると伝えられた。旅人が何人もくわれたともいふ。

ある日、寺の番僧が淵へ洗たくに行った。小雨の降る淋しい日だったが帰り道で大雨になった。

雷が光り、それはものすごかった。その時何者かが僧を連れ去った。寺では番僧が帰らないので探したが、洗った衣だけあった。

多分、主にくわれたものと思ひ、あつくとむらった。それから幾年か過ぎたころに通りすがりの武士があわれに思つて退治した。そ

それは大きなわにであつた。

それから淵は浅くなり、そして湖水のような淵はみられなくなつた。そしてその淵のあとは畑になつた今も、不思議と作物がよくできるといふことである。

出 会 い 淵

鶴川と久米川との合流点は広い淵となり、出会い淵という。

ここは布巻き蛇という主がいると伝えられた。

それは旅人が通行すると向うの方に美しい布が落ちて見え、拾おうと思つて そばに行くと蛇になつて、逃げる間もなく巻かれてしまふ。こうして幾人かの人達が命を失つた。

ある時、近くを通つた侍がこれを聞いて気の毒に思つて退治することにした。向うに見える赤い布を目がけて、弓で射止めたのを見ると途方もない大蛇であつた。

それからは、何事もなくなつた。

万 代 淵

昔、夏のころ古町の子どもたちは、いつも淵に水遊びに行った。遊んでいると向う岸の方で何かピカピカ光つて見える。毎日のように、このうわさが伝つたので人達も不思議なことだとうわさした。その時古町の「念仏おやじ」とあだなのある万作が夢知らせがあつ

たと語つた。

おやじのいうには、枕元に仏様が現われて万作よ、わしはあの淵の底に沈んでいる。もし上げてくれればお前も古町も安楽に暮してやると語つた。なおほかに村の年寄が三人ほどわしもそういう夢を見たと話した。

それで、村人は相談して水をほしてみると二メートル位の座仏（座つた仏様）が現われた。光つたのは顔にある金のほしであつた。そして道ばたにお堂をつくり、この座仏を安置した。

それが今に残るお堂である。それから念仏おやじは長者になるし、村の稲作はよくなり、その上、それから古町には今日まで火事は全然起らないという。

その淵は「万代淵（ぼんだいふち）」と呼ばれて今も残っている。

観 音 淵（山口）

山口地内の鶴川の河流に大きな淵があつて、村人は観音淵とよんでいる。淵の傍に露坐の観音像が安置され、その守護で、この淵で水死した少年は一人もないと言われ、夏は子供の水浴場になるのであつた。

ある夜、盆踊り帰りの若者が、いたずらして観音像のむきを変えた。翌朝、その若者が見ると、いつもの通り観音像は、観音淵に面して立っておられた。

奇怪に思つて、翌日の夜もためし、観音像のむきを変えておいたが、その翌朝は、いつもの様に淵にむかつて立っておられた。

この事が村の評判になり、観音淵の観音像を信心する者が多くなつたといふ。

せえふる地藏

山口の村に胸まで埋められた地藏仏があつて村人は、これを「せえふる地藏」「夜ばえ地藏」とよんでいる。

この地藏は、村の若衆と仲よしであつた。そして村うちで、祝い事のある家があると、その前夜、その家のふるに、おはいりになるのであつた。何しろ石の地藏仏なので、一人や二人では、ふるから出す事が出来ず、村の若衆に酒をふるまつて、その地藏仏を処理してもらふのであつた。村の若衆は、地藏仏のおかげで、時々こうした酒ふるまいに、あずかる事が出来たのであつた。

所が、村一番の力もちが、この事をにががしく思い「歩かれないようにしてやる」と

と深い穴を掘つて、この地藏仏を、胸までうめたという事であつた。

佐水にのこる毘沙門天の由来

延暦年間、上条の里、佐水字マブタというところに喜衛門という百姓がいた。この家に坊太郎という作男（さくおとこ）が雇われていた。そのころ郷之原（ごうのはら）というあたりは人殺しやどろぼろがしじゅうあつた。それが坊太郎の仕業（しわざ）であること

を知つた喜衛門は彼に暇（ひま）を出した。獣のような彼はスジガ沢に住んで、毎夜柏崎に出て悪いことを続けていた。

ある夜、襲（おそ）つた旅人が思いもかけず有名な伝教大師（最澄）であつた。さすがの坊太郎も大師の如意（にょい）一杖一で傷つけられた。彼が点々と流した血をたどつて大師はスジガ沢にいたつた。坊太郎は、かくれ家を知らせたものは喜衛門にちがいないと思ひこんで、喜衛門に組みついて左眼をかき出した。そこへ伝教大師が追いついて鬼の坊太郎を切つたといふ。彼の首を坊山に、胴を袋方（ふくろがた）に埋め、雨池から椿の木を取つてきて、大師自ら毘沙門三像を刻んで坊山（現在の城北中学校西方）に堂を建て、三体をそこに安置した。

それでこの地を坊山といふのである。悪魔退散（あくまたいさん）に、ご利益（りやく）あるといふので、土地の信仰を集め、謙信公の時代に弓矢除（ゆみやよけ）のお守りが将兵に授けられた。謙信公はこの寺に毘沙門三・九ヘクタール（今の土地台帳には比砂田といふ）を寺領として与えた。

上杉家が会津移封の時、本尊を剣野の洞雲寺に置いて行かれ、それが同寺の末寺常福寺へ移され三体のうち他の一体は鶴川村女谷高原田、今より二百年程前、宝暦年間九代將軍家重時代に中村久衛といふものによつて堂主了全和尚の手に移された（高原田尼寺毘沙門縁起による）

他の一体は上越線浦佐方面に移されたともいふ。

（注）現在、佐水には「坊山」「比砂田」「スジガ沢」（山林）などという地名が残っており、皆、土地台帳にもある。雨池には周囲五十メートル位の池があり、喜衛門宅跡は名称字マ

ブ一七八三番地がそれであり、毘沙門天は 荒神で、いわゆる毘沙門だちに足を踏まえて邪教(じゃきょう)をおさえつけ、仏法の恵みを撒(ま)き与える役目で「撒与(さんよ)撒与」の掛声はそれから出たものといわれている。

年夜のごぶまき 一

佐水の関矢家では、最近まで大みそかの夜は決してごぶまきをしないし、決して食わないしきたりであったといわれている。

昔、関矢家のばばさまが、大みそかにこんまきをしかけて、一寸所用に隣家に出かけたときに、鬼どもが、においをかぎつけて集まり「うまい」「うまい」

と言って、ばばさまがしかけておいた、大鍋いっぱいのごんまきを一つ残らず平げた。

帰って来たばばさまは、これを見てカンカンに怒り、「もう金輪際年夜にはごぶまきを作らんし、子や孫にも、作らせるものか」

と、歎いたという。それから関矢家では、年夜には決してごぶまきを作らなかつたという。

年夜のごぶまき 二

その年は凶作であった。

佐水の名主関矢さんは、部落の年貢米が、まだ若干俵不足しているので、大みそかの日もあちこち飛びまわったが、もう部落には、さし出す年貢米一俵の余裕もなく、困りはてていた。関矢さんのるすに、役人が年貢米の督促にやって来た。見るとまだ年夜のごぶまきもしていない。

「もうすぐ年夜ではないか。なぜごぶまきを作らないのか」と、言うとき、家人が

「主人が心配して歩きまわっているのに、のん気にごぶまきなど作っておられませんか」

と、言うのを聞いて、役人は気の毒になり、

「残った年貢米のさし出しは、来年まで待ってやろう」

と、言って、帰ってしまった。

関矢さんでは、それからは年夜には、ごぶまきを作らない事にして殿様のあたたかい心を思い出す事にしたという。

破風のない家

佐水に一人の老人がいて、ある日ししが沢の自分の山畑へ行ったら時鬼の洞穴を発見した。鬼は「村に帰って村人に俺の住家話話してくれるな、そのかわりお前の仕事を手伝ってやるから」と頼んだ。

佐水の老人は「だれにも鬼の住家は話さない」と固く約束した。二人は山畑に行つて畑を耕した。

その年の除夜に一人の山伏がこの老人の家に泊った。いろいろ話の末、老人はししが沢の鬼の洞穴のことを話した。とたんに鬼が現

われて乱暴し老人につかみかかろうとしたので山伏は刀を抜いて鬼に切りつけた。鬼は驚いて破風からのがれようとしたところ、山伏は破風もろとも鬼の首を切り落した。

それから、この家では破風を作らないという。

芋川のいすす淵としゃたん淵

○しゃたん淵

芋川部落の東の方、二〇〇メートルほどのところに、久米川をせく、長さ二〇メートル、巾四メートルばかりのせきがある。

夜そこを通ると人の泣く声が、せきの下から聞こえるという。村人が不思議に思って、淵の下をさらって見たところ、六部の背負ったサタン（仏を入れて背負うもの）がみつかった。それ以来、そこを「しゃたん淵」とよぶようになった。

○いすす淵

淵の底で石うすを動かしているような音が聞えてくるので、「いすす淵」とよんでいた。



小田山勘右エ門むじなの由来

小田山（こだやま）新田に勘右エ門という農家があった。

裏山にむじなの穴があり、むじなの一族が住んでいた。勘右エ門は、そのむじなを子どものように可愛いがっていた。それを恩にきたのか、勘右エ門が何か欲しいものがあれば穴の前に行って話すと翌朝その品物がそろえてあったという。

幕末ころ、むじなは親子なかまをみんな連れて群馬県方面へ行つたこのことである。

渡し場へ、きれいな若者が七・八人やってきたので、どこのものかと渡し守が聞いたら越後小田山の勘右エ門の若い衆だと言ったそうである。

蜘蛛切り橋（くもきりばし）

上条の丘に、上条弥五郎が城主としておったころのことである。弥五郎は争乱の続く時代にもかかわらず、領民（りょうみん）をよく治めていた。そのころ、古町に「化け物が出て行人をとって食う」といううわさが流れ、それがだんだん近くの村々までひろがっていった。弥五郎はこのうわさを聞いて、このままでは領民が安心して暮せないし、自分の名譽にもかかわると思ひ、家臣の中でも勇猛（ゆうもう）のきこえ高い、大橋清兵衛という侍にこれを見届け

て退治(たいじ)することを命じた。

言いつけを受けた清兵衛は夜になるのを待って古町に行った。くずれかけたお堂があり、戸のすきまから、のぞいて見ると、女が子どもをだいて立っていた。これは怪しいと思い、「あなたは何者か、何の用があって、こんなところにとまっているのか」とたずねた。女はだまって、清兵衛を見てにっこり笑った。その笑顔の美しさに思わず見とれていたが、気をとりなおして、刀のこじりで子どもの頭にさわったところ、カチンという音さてはと思ったが待てしぼしと思案し、化け物退治には陰を切れという言葉を思い出し、いきなり抜き打ちに切りつけた。キーと異様な声とともに、さーっと何物かが外へ逃げた。

南下の桂川にある土橋のところまでおっかけたところ、すでに東の空が白んできた。そこでいっそう元氣を出して、ようやく切りたおした。見れば大きくもであった。

清兵衛は弥五郎にこのことを申し上げて領民を安心させた。今もお、清兵衛の手柄を伝えて「明け橋」「蜘蛛切り橋」の名が伝わっている。

